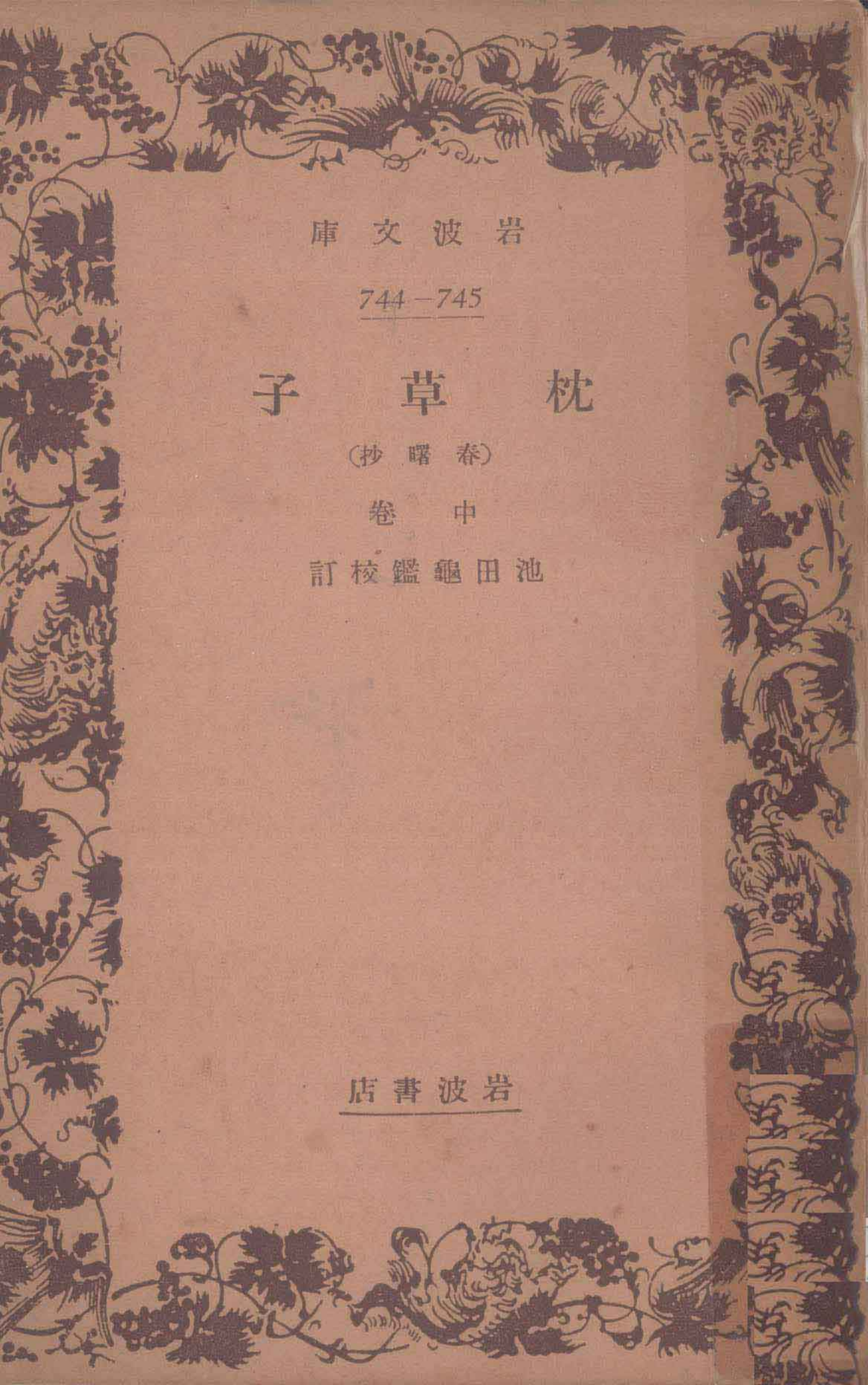




庫文波岩

744—745

子 草 枕

(抄曙春)

卷 中

訂校鑑龜田池

店書波岩

岩 波 文 庫
744-745

昭和六年八月十五日印刷
昭和六年八月十五日發行



發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩 波 書 店

電話 一二八一・二一〇八番
九段 二一〇九・二六二六番
(一〇二三)小賣部專用
原町口座東京二六二四〇番

校訂者

枕草子 中卷 ★★

定價四十錢

池 田 龜 鑑

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩 波 茂 雄

印刷者

東京市本所區板橋一丁目三十七番地

守 岡 功

印刷株式會社印刷

岩波文庫

744-745

枕草子

(春曙抄)

中卷

池田龜鑑校訂



岩波書店

目次

卷五

枕	七七	めでたきもの……………	七
	七八	なまめかしきもの……………	二
	七九	宮の五節……………	一五
草	八〇	無名といふ琵琶……………	二三
	八一	上の御局の……………	二六
	八二	御めのとの太夫の……………	二七
子	八三	ねたきもの……………	二八
	八四	かたはらいたきもの……………	三三
	八五	あさましきもの……………	三五
	八六	くちをしきもの……………	三六
	八七	五月の御精進のほど……………	三八
	八八	御かたがた、君達……………	五一
	八九	中納言殿まゐらせ給ひて……………	五三

九〇	雨のうちには降るころ……………	五四
九一	はやおほささいの宮に……………	五五

卷六

九二	作物所に別當する比……………	五七
九三	淑景舎東宮に参り給ふ……………	五八
九四	殿上より梅の花の……………	五九
九五	二月つごもり……………	六九
九六	はるかなる物……………	七一
九七	方弘は……………	七二
九八	關は……………	七五
九九	森は……………	七六
一〇〇	卯月の晦日に……………	七七
一〇一	湯は……………	七八
一〇二	常よりもことに聞ゆる物……………	七八

一〇三	繪に書いて劣る物	六
一〇四	書きまさりするもの	七九
一〇五	あはれなる物	七九
一〇六	正月に寺に	八三
一〇七	心づきなき物	九二
一〇八	わびしげに見ゆる物	九二
一〇九	暑げなるもの	九三
一一〇	恥しきもの	九四

卷七

一一一	むとくなる物	九八
一一二	修法は	九九
一一三	はしたなきもの	九九
一一四	關白殿の	一〇二
一一五	九月ばかり	一〇四
一一六	七日の若菜を	一〇五
一一七	二月官のつかさに	一〇六
一一八	頭の辨の御許より	一〇八
一一九	などてつかさ得はじめたる	一一一

一二〇	故殿の御ために	一二三
一二一	頭の辨の	一二五
一二二	五月ばかりに	一二九
一二三	圓融院の	一二三
一二四	つれづれなるもの	一二六
一二五	つれづれ慰むる物	一二六
一二六	取り所なきもの	一二七
一二七	なほ世にめでたき物	一二八
一二八	故殿など	一二九
一二九	正月十日	一四二
一三〇	清げなる男の	一四三
一三一	おそろしきもの	一四五
一三二	清しと見ゆる物	一四五
一三三	汚げなる物	一四五

卷八

一三四	いやしげなる物	一四七
一三五	胸つぶるる物	一四八
一三六	うつくしき物	一四九

一三七	人ばへする物	一五二	受領は	一八二
一三八	名おそろしき物	一五三	やどりのつかさの權の守は	一八二
一三九	見るに異なる事なき物の文字に		大夫は	一八三
	書きて事々しき物	一五三	女の獨り住む家などは	一八四
一四〇	むつかしげなる物	一五四	宮仕へ人の	一八五
一四一	えせものの所得る折の事	一五四	雪のいと高くは	一八八
一四二	苦しげなる物	一五九	村上の御時	一八九
一四三	羨しきもの	一六〇	御形の宣旨	一九一
一四四	疾くゆかしき物	一六一		
一四五	心もとなき物	一六二		
一四六	故殿の御服の頃		卷九	
一四七	宰相中將齊信	一六三	宮に初めて	一九二
一四八	此三月三十日	一六四	したり顔なる物	二〇三
一四九	弘徽殿とは	一六五	風は	二〇五
一五〇	昔覺えて不用なる物	一六六	野分の又の日こそ	二〇六
一五一	頼もしげなき物	一六七	心憎き物	二〇八
一五二	近くて遠き物	一六八	鳥は	二〇九
一五三	遠くて近き物	一六九	濱は	二一〇
一五四	井は	一七〇	浦は	二一一
		一七一	寺は	二二一

一七二	經は……………	二三	一八一	舞は……………	二二〇	一九九	三條の宮に……………	二四〇
一七三	文は……………	二二四	一八二	引ものは……………	二二三	二〇〇	成信の中將こそ……………	二四二
一七四	佛は……………	二二五	一八三	調は……………	二二三	二〇一	大藏卿ばかり……………	二四三
一七五	物語は……………	二二七	一八四	笛は……………	二二三	二〇二	硯きたなげに……………	二四三
一七六	野は……………	二二八	一八五	見る物は……………	二二五	二〇三	珍しと言ふべき……………	二四五
一七七	陀羅尼は……………	二二九	一八六	五月ばかり……………	二二〇			
一七八	讀經は……………	二二〇	一八七	いみじう暑き比……………	二三一			
一七九	遊びは……………	二二〇	一八八	五日の菖蒲の……………	二三一			
一八〇	遊び事は……………	二二〇	一八九	よくたきしめたる蕪物の……………	二三			
一八一	舞は……………	二二〇	一九〇	万のいとあかきに……………	二三			
一八二	引ものは……………	二二三						
一八三	調は……………	二二三						
一八四	笛は……………	二二三						
一八五	見る物は……………	二二五						
一八六	五月ばかり……………	二二〇						
一八七	いみじう暑き比……………	二三一						
一八八	五日の菖蒲の……………	二三一						
一八九	よくたきしめたる蕪物の……………	二三						
一九〇	万のいとあかきに……………	二三						

枕草子春曙抄 卷五

七十七

枕

草

子

7

一梅檀沈香等の
木像の木目也
二麴座の袍號青
色文桐竹鳳凰と
桃華華葉に有り
三藏人所衆也、
前註
四藏人にならぬ
間は是らの官位
の人の下座に居
て物の數も見
えざりしも藏人
になれはめでた
き也
五あまりにめで
たきなりはんと
て也
六甘栗使禁中よ
りたつ也

めでたきもの、唐錦、飴太刀、造佛のもく、色合よく花房長く咲きたる藤の松にか
かりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれどもえしも着給はぬ
綾織物を心にまかせてきたる。青色姿などいとめでたきなり。所の衆、雑色、たゞ
の人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位六位もつかさあるが下にうちゐて、何と
見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨もて
まゐり、大饗の甘栗の使などにまゐりたるを、もてなし饗應し給ふさま、いづこな
りし天下り人ならんところおぼゆれ。御むすめの女御后におはします。まだ姫君な
ど聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文取り入るゝよりうちはじめ、しとねさし
出づる袖ぐちなど、あけくれ見し物とおぼえず。下襲のしりひきちらして衛府な
るはいま少しをかしう見ゆ。自ら盃さしなどし給ふを我心にもおぼゆらん。いみ
じうかしこまり、べちにゐし家の君達をもけしきばかりこそかしこまりたれ。おな
じやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへ

セ響應也、主人藏人にあひて祿給ふ事あり。江次第委
 全大人にやこ也。
 六位藏人事也
 九攝家大臣家の事也
 三人内なきほど也
 二御使にまゐれる六位藏人への會釋也
 三裾也
 三衛府藏人にて衛門兵衛など兼ねたる也
 一攝家などにて也
 一五六位藏人が心にも也
 一云句
 一七日比地下にてありし間一所にも居ず、畏まりたる人々にも藏人に成りては同

こそおぼゆれ。御文書^かかせ給へば、御硯^{すみ}の墨すり、御團扇^{うちあ}などまゐり給へば、我^{われ}つかうまつるに、三年四年ばかりの程^{ほど}を、なりあしく、物の色^{いろ}よろしうてまじろはんはいふかひなきものなり。かうぶりえておりん事^{こと}近^{ちか}くならんだに、命^{いのち}よりはまさりてをしかるべき事を其御賜^{たまは}りなど申してまどひけるこそ口惜^をしけれ。昔の藏人は今年^{とし}の春よりこそなきたちけれ。今の世^よにははしりくらべをなんする。

○めでたき物——見事なる也。

○からにしき——唐錦、蜀錦などなり。

○かざりだち——延喜式彈正云凡畫^{エカキカザリ}飭^{カザリ}太刀五位以上聽^{ヒルイ}之^ヲ。桃華藥葉云、飭^{カザリ}劍三節會、内宴、御禊行幸等玉卿用^{ユク}之^ヲ云云。昔は二宮の大饗にも公卿以下飭^{カザリ}劍を用ゐる。近代樋螺劍を着すと江次第にあり。

○六位藏人——官位不審問答^ニ六位の時地下の者も藏人に補し候へば昇殿禁色をゆるされ候云云。

○ざふしき——藏人所雜色也。禁祕抄云本員^ニ八人。代々皆轉^ス藏人^ニ、仍公卿子孫又可^レ然諸太夫多補^{フス}之^ニ。職原抄云良家子補^ス之^ニ云云。

○せんじもてまゐり——内侍宣^{イニシヒ}とて藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參する也。宣旨とはの給ふむねとよむ也。天子の仰せを藏人頭承りて其旨を直に宣下するを内侍宣とはいふ也。河海にあり。

じやうにつれあ
りくこ也
六句
天子の藏人を
めしつかはせ給
ふ也
三帝御書か、せ
給ふ也
三藏人也
三署比、侍臣
なご帝をあふぎ
申さるれば藏人
御團扇給はりて
あふぐ也
三六位藏人にて
侍るほご也
云大かたなる心
也、六位藏人に
てある程は衣裳
なごきらくし
くてまじらへか
しこ也
云地下になりて
は御前へ参る事
もなくなれは也
古今に命にもま
さりてをしくあ
る物はごよめる
詞也
云イミ口
宅藏人おりん事
をなけく也
云今はむかしの
やうにはなき心
也
一博士の才智あ
る也、花鳥云博

○大饗のあまぐりのつかひ——大臣の大饗に蘇甘栗キヤウツアマツリの使とてあるに、六位藏人
参る事也。大臣大饗とは大臣に任ぜられたる人。大納言以下、辨、少納言、官
外記史などまで饗應せらるゝ事也。江次第二日、大臣家大饗正月四日ハ左大臣ノ饗
五日ハ右大臣ノ饗
氏一大臣用ニ朱器臺盤。以ニ其日ニ可レ行由以ニ職事ニ達ニ天ニ聽。是非ニ式日一時依
レ可レ遣ニ蘇甘栗使並饗祿樂部等事一歟。藏人到ニ中門一以ニ家司一令レ奉ニ蘇甘栗等。
盛ニ折櫃ニ合ニ合一合ハ蘇大二一合ハ甘栗大各居ニ土高坏ニ入ニ外居一荷ニ小舍人二人衣
冠相具。仕丁二人着ニ荒染一持レ之藏人着ニ青色袍ニ於對庇可レ進歟。
○御使にて——藏人のまゐる也。禁祕抄云、御使事、依レ人依レ事有ニ差別。藏人
頭、近衛將、五位藏人、六位藏人等也下略。
○御文とりいるゝより——女御后まだ姫君の方へ取りいるゝ也。禁祕抄云、御
書事、后女御以下於ニ女房ニ無ニ定子細ニ勿論歟、料紙女房許多薄様、後々檀紙也
上下略。
○からぶりえておりん事近く——六位藏人巡ジュンシヤツ爵とて五位に叙して、藏人をさ
りて、地下におるゝ事也前註。
○其御たまはりなど申して——御給也。巡爵ののち受領など申す事也。
博士はかせのざえあるはいとめてたしといふもおろかなり。顔かほもいとにくげにげらふなれ
ども、世にやんごとなき物に思おもはれ、かしこき御前に近ちかづきまゐり、さるべき事な
る也、花鳥云博

七は博達之士といふ事也
 二才智ゆゑに世にたふさまる、也
 三禁裏春宮など、をさしていふ也
 四詩序など也
 五至りてめでたき心也
 六晨朝日中などに經よむ事也
 七讀經也
 八才ある法師は猶也
 九たれなごいふ心也
 一〇灯明おそし心の心也
 二行啓
 三是中宮の御産也
 四作法がましき心也
 五御膳を据ゑる物也、桐壺卷に大床子のおものさあり
 一五竈、御膳御飯のため也

ど問はせ給ふ御文の師にてさぶらふはめでたくこそ覺ゆれ。願文もさるべきものの序つくり出して賞めらるゝいとめでたし。法師のさえあるすべていふべきにあらず。持經者の獨りして讀むよりも、あまたが中にて、時など定まりたる御讀經などに、猶いとめてたき也。暗うなりて「いづら御讀經油遅し」などといひて讀み止みたるほど忍びやかにつゞけるたるよ。后のひるの行啓、御産屋。みやはじめの作法しく。狛犬。大しやうじなどもてまゐりて、御帳の前にしつらひ据ゑ、内膳、御竈わたし奉りなどしたる。姫君など聞えしたゞ人とこそ露見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日詣。葡萄染の織物。すべて紫なるはなにもくめてたくこそあれ。花も糸も紙も。紫の花の中には杜若ぞすこしにくき。色はめでたし。六位の宿直姿のかしきにも紫のゆゑなめり。廣き庭に雪の降り敷きたる。今上一の宮まだ童にておはしますか御をちに上達部などの若やかに清げなるに抱かれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬ひかせて御覽じあそばせ給へる、思ふ事おはせじと覺ゆる。

○はかせのさえある——儒家に紀傳明經などあり。環萃云、明經道は十三經を以て家業とす。紀傳道は三史史記漢書後漢書文選等を家業とす。
 ○下らふなれども——官位ひきき事也。文章博士は從五位下。大學博士は正六位下の相當也。官位令にあり。

三句
 七人内以前の其人とも見えず嚴重なる也
 六攝政關白を申す也
 元藤原の祖神なれば必ず一の人參詣ある事也
 三菟菊染は紫なるにつけて也
 二花糸紙何も紫よし也
 三句
 三花の形を云ふ也
 二是も色は憎からぬ也
 五六位藏人の宿直姿也
 二紫色をゆるゆるに也

○御ふみの師にて——帝の御師範也。御侍讀とて候する也。禁祕抄云、紀傳御侍讀能々可^レ有^ル清撰^ニ世之所^ノ許^ル明書也。

○願文——御祈禱追善等にかく文也。本朝文粹菅家文章などに願文數多有り。
 ○いづら御どきやうあぶらおそし——くらくて人はよみやみたるに才ある法師はそらに覺えて一人讀誦する也。

○后のひるのぎやうけい——書行啓春宮后宮の御ありきを行啓といふ也。

○みやはじめのさほうしく——立后の作法禁中のごとく、狛犬、大床子などしつらふ事也。こゝは定子の皇后宮に立給ひしはじめの作法しき事にや。正暦元年六月一日なるべし。榮花物語かゞやく藤壺の卷に、上東門院立后の所云、此たびは藤壺の御しつらひ大床子たて、御帳の前のかま犬なども常の事ながらめとゞまりたり云云。

○内膳御へついわたし奉り——百寮訓要云、内膳司天子の供御を奉行する所也。たとへば膳部所など申す所と同事也。昔は内膳の御飯ならでは主上はきこしめさぬ事也。およそまろくの御膳の具は、此所におかる云云。立后有りては禁中の儀式をうつすさまなるべし。

○今上一の宮——^{キンジャウイチノ}ミヤ或ハゲン上——一條院の第一の皇子敦康親王の御事にや。御母は后宮定子なれば、御叔父に内大臣伊周、中納言隆家卿など上達部あり。

七十八

也一直衣着たる姿也
 二句
 三汗衫、前に註す
 四イラづちくすたまなご
 五高欄也、らんかんなり
 六顔にさしかざしたる也
 七若き女房也へすそ也
 九かの女房の着たる物也
 三薄様にて書きし草紙也
 二村濃
 三イもえ出たる
 三三重
 四五重
 五厚也
 六檜扇の手もこ也
 七檜破籠也

なまめかしきもの。ほそやかにきよげなる公達の直衣姿、をかしげなる童女の表の袴などわざとにはあらで。縦びがちなる汗衫ばかり着て、薬王など長くつけて、かうらんのもとに扇さしかくしてゐたる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたうちかけて、白き綾、二藍引襲ねて、手習ひしたる。薄様の草紙、村濃の絲してをかしくとぢたる。柳の萌えたるに、青き薄様に書きたる文附けたる。髻籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重襲の扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげ也。よくしたる檜破籠。白き組の細き。あたらしくもなくていたくふりてもなき檜皮屋に菖蒲うるはしくふきわたしたる。青やかなる御簾の下より朽木形のあざやかに紐いとつやゝかにてかゝりたる。紐の吹き靡かされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる簾の外のかうらんのわたりに、いとをかしげなる猫のありき、首綱に白き札つきて碇の緒食ひつきて引きありくもなまめいたり。五月の節のあやめの藏人。菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを領巾裙帶などして、薬王を、みこ達上達部などの立並み給へるに奉るもいみじうなまめかし。とりて腰にひきつけて舞踏し拜し給ふもいとをかし。ひとりの童小忌の君達もいとなまめかし。六位の青色の宿直姿。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。

也。二組糸のほそき

元檜皮屋也

二菖蒲

二イ几帳のくち

きかたのトアリ

可用

三簾の外也

三首綱也、猫の

引つな也

二猫の名など書

きて札付けしに

や

二五領巾裙帶

二立竝也、たち

ならび也

二毛王卿薬玉をこ

りて也

二舞踏也、前注

元拜也

二六位藏人也、

前注

○なまめかしき物——優美なる心也。

○きんたち——公達とは攝家の子息、清華などを申す也。

○うへのはかま——表袴。ウヘノハカマ

○夏のきちやう——几帳の帷、夏は生絹を用ゐる。したうちかけてとは、几帳

のかたびらのすそを帳臺にうちかけたる也。

○ひげこのをかしうそめたる——髯籠の竹を繪の具などにてそめて五葉の松に

ゆひつけし也。

○みへがさねのあふぎ——河海抄云、檜扇の兩方の上三重づゝ薄様にてつゝみ

て、色々の絲にてとぢて、あはひむすびにしておきたる也。五重もおなじ風情

なり。

○くちぎがたの——冬の几帳の繪也。禁祕抄清涼殿の所にいはく、四面有ニ几

帳二帷夏生以ニ胡粉一畫二葦雀一、冬朽木形云云。ハスマシテコフンヲエガクアシツルヲハクチキガク

○いかりのを——猫の綱に碇をつけて物にかけて猫を引とゞめんためにしたる

也。其緒を猫の食ひたれたるさま也。

○五月のせちのあやめの藏人——五月五日の節に内侍女藏人續命縷を群臣に給

ふと花鳥餘情にあり。前注。是をあやめの藏人といふにや。

○あかひもの色にはあらぬ——赤紐は五節などの時、紗をたゝみてあふひむす

びをして泥繪ディエなど書きて、右の肩に二筋スガつくる事あり。菖蒲のかづらは其赤紐アカヒモの色ならであをきをいふ也。

○ひれくたいなどして——領巾ヒレ、裙帶フンクタイ也。順和名云ガニフヒレ領巾、日本紀私記云ニツヒレ比禮婦人

項ノカザリ上飾也。裙帶フンクタイ。和名云、白氏文集云青羅裙帶ヒトリ裙帶此問云如ニツシ字。

○ひとりのわらは——五節の舞姫マヒメまるる時、薰爐をもつ童女也。江次第ニツ第十云、舞姫等次第参入。先童女一人持ツ火取一次童女一人持ニツ茵ヒトリ五節調臺試并御前試の所にもあり。

○をみの君達——是豐明トヨノアカリの節會に小忌衣着したる君達也。江次第に小忌王卿ヨミノ。小忌大夫ミミマウチギミなどいへるこれ也。幻マボロシの卷五せちの比の所に、頭中將藏人少將などをみにあをずりのすがたきよげにめやすくてとあり。河海云、小忌青摺山藍摺也。ヤマアサギ花鳥云、十一月中卯日新嘗會辰日豐明節會には、山あゐにてする小忌といふ物を着する也。一代一度の大嘗會ダイショウウエにもかくのごとし云云。

○りんじのまつりの舞人——賀茂八幡などの臨時リンジの祭に舞人あり。前註。江次第等委シ。

○五せちのわらは——五節の舞妓の童也。善相公異見曰、五節舞妓者大嘗會時五人、皆預アツカル二叙位ニニ、其後年々新嘗會時四人。又曰擇ヒナ良家女未ノザル嫁者セヨ置爲テ五節妓云云。

一句
ニイ女御みやす
所の
三女院の御方の
人淑景舎の御
方の人兄弟也
四舞妓かしづき
なごの也
五赤紐、前ニ注
ス
六様子したる也
七小忌のさま也
八檜木也
九唐衣のうへに
かの小忌を着た
るなるべし
一〇イニからきぬ
うへに
二舞妓也
三傳シモヅカハ
江次第によめり
十二人のかしづ
きにや
三隠してし給へ

宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人。こと所には御息所の人出すをば、わろき事にぞするときくに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今ふたりは女院淑景舎の人やがてはらからなりけり。辰の日の青摺の唐衣汗衫を着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじうかくして、皆装束したちて、暗うなりたる程にもてきて着す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣にかた木のかた、繪に書きたる。織物の唐衣の上に着たるは誠にめづらしき中に、わらははいま少しなまめきたり。下仕へまでつぎきたちするたる。上達部殿上人おどろき興じて、をみの女房とつけたり。をみの君達は外にゐて、ものいひなどす。五節の局をみなこぼちすかして、いとあやしくてあらする、いと異様なり。其夜まではなほうるはしくこそあらめと宣はせて、さもまどはさず、几帳どもの綻結ひつゝ、こぼれ出てたり。小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、これを結ばばやといへば、實方の中將よりてつくろふにたゞならず。あし引の山ゐの水はこほれるをいかなる紐の解くるなるらん。といひかく。

○宮の五せち出させ給ふに——后宮定子の御方より也。常は公卿受領より出す